



1. “欠陥車”の報道の語るもの
2. 文明は業務の細分化をすすめるのか
3. 水資源とソフトウェアの開発

1. このところ、ほとんどの新聞は連日国産欠陥車の記事で埋まっている。利用者にとってはいうにおよばず、何が何でも売上げを伸ばそうと努め、生産台数においては世界第2の地位にたどりついた日本の自動車産業に対しては、時期を得た警告であったかもしれない。

ところで、アメリカにおいては、新車種発売と同時にその欠陥を報告する義務があるそうだから、当然現在使用中の欧米車にも何らかの弱点があると見てさしつかえなからう。しかし、この件に関する各紙の報道内容から受ける総合的な印象は「日本製の車は欠陥だらけであるから、買うなら少々高くても、貴重な外貨を支払っても欧米車にしろ」といった感じである。報道関係者は事実を報道する義務があり、欠陥車に対して事実を伝えている点非難の余地はない。

しかしある事実を報道し、ある事実を見逃がしたり、ちょっとした表現方法、あるいは言葉づかいの違いによって、一般読者にあやまった見解を持たせる場合がある。思想、政治あるいは一国の経済をも動かす力をもっている報道関係者は、小さな問題であっても、その記事が一般に受け取られる状況まで考えて慎重に扱ってもらいたい。

建設工事にとまらぬ事故の報道、でき上った高速道路に対する非難等を見せつけられるとき、土木技術者として、十分その責任の認識を新たにすると同時に、心の片隅でくすぶっている若干の不満を、他の分野での問題にかくれてちょっぴりのぞかせて見た。 [J]

2. 文明が進むと仕事が細分化するといわれている。先日、ある花形産業のマスプロ工場を見学したが、ある作業員は1日中そして毎日、ドライバーで同一箇所のねじ一本だけの取付けの繰返しであった。これでは、とても人間であるとはいえない。われわれ、土木の分野にも細分化が押し寄せてきて、設計・積算屋という職人めいた技術者がでかかっている。これは、職務内容による分化から派生したもので、調査、試験・研究、企画、設計、施工などが考えられる。このほか、学術上の系統的な分化、たとえば、道路・河川・港湾・発電さらに橋梁・水文・土質などがある。われわれの職業は両者の組合せの上に位置づけられているのであるが、自分の選択によることは少ない。つまり、学業を終えて社会へ出るときの就職先と入ってから年功である程度決ってしまう。民間の建設業に入れば、設計・施工が主になるし、大学に入れば、専ら研究生活に明け暮れることになる。ところが、最近では、細分化された各自の仕事のほかに、どの技術者・研究者でも管理という細分化をシステムティックにまとめる立場で、いろいろのことがらに対処しなければならなくなってきた。これは、非常に大切なことであつたにもかかわらず、それぞれの職に就いてから、各自の経験や研鑽で習得されてきた。しかし、現在ではリーダーシップ・ヒューマンリレーション・マネージメントなどの問題は、かなり体系づけられて経営学とか管理学として一本立ちしているのであるから、土木工学科のカリキュラムの中にも、何らかの形で取り入れたらどんなものであろうか。

原則を知って経験する方が、頭の回転がかなり老化してから、経験をもとに学ぶより、よほど効率が良いと思われる。 [C]

3. 新しい全国総合開発計画が国土総合開発審議会から政府に答申された。第1回の全国総合開発計画は昭和37年につくられ、その主要目的は過密防止と地域格差の縮少であった。特に“拠点開発方式”を政策の基本としてきた。しかしながら、過密過疎と地価の上昇は続き、政策の目標と現実と大きなずれを生じている。今回は情報化社会に応じた環境づくりを目標としており、前回の計画においてとり上げた“拠点開発方式”の反省の上に立って新しく“ネットワーク”方式を登場させている。今回の計画には、あまり大きく取り扱われていない問題として水資源の開発と電子計算機のソフトウェアの開発がある。これらの開発のいかんにより20世紀の日本は大きく変わったものとなるであろう。特に昭和60年には総人口の約70%が市街地に住むであろうと予測されているが、このための水をどこから確保するのであろうか、水なくして人間は生活できないし、工業用水なくして産業プロジェクトの推進などはできないのである。最後に情報化社会の到来を予測しながらもソフトウェアの開発を取り上げていないことはなぜであろうか？ソフトウェアの開発が将来の産業の死命を制するものであるという認識に立って欧米先進国ではばう大な費用を投入しはじめている。現在のソフトウェアの開発速度で行けば、日本はとてもアメリカを追い抜き20世紀に国民総生産が第一位になるというような状態にはなり得ないような気がするが如何か。 [S]